

〈論文〉

『文型』再考 (2)
——「追加表現」と「語順の圧力」——

葛西清蔵

(『文型』再考(1)では、検討すべき文としてあげた、つぎの文、

- a It blew a heavy gale.
- b She dreamed a strange dream.
- c He struck me a hard blow.
- d The clock ticked the baby awake.
- e It is some boys playing outside. /This is Jane speaking.
- f There was the horse galloping.

のうち、(a) から (c) までの文を検討した。本稿では (d) から (f) までの文を、「追加表現」と「語順の圧力」をキーワードとして、その性質を検討する。

7. The clock ticked the baby awake. の構造

この種の文は、最近、「結果構文」として話題になっているものである。⁽¹⁾ もともと、この文は、

- 37. a The man ate the fish raw.
- b He struck the dog dead.
- c He painted the wall white.

などの文で、(37a) の raw が、the fish をたべたときの the fish の様子をあらわす「状況補語」であるのたいして、(37b, c) の dead, white は、たしかに「影響をうけ」(affected) しており、それぞれ、the dog, the wall を、それぞれ struck, painted した「結果」をあらわす「結果補語」としてあつかわれる、ひとつのグループをなす、と考えられたところからはじまるものである。

38. a The dog was struck dead.
b The wall was painted white.

(38a, b) の受動態をみても、the dog, the wall は、たしかに目的語としての資格をもっていることがわかる。関連するつぎの例はどうであろう。

39. a He shouted his throat sore.
b He shouted himself hoarse.

40. a *He shouted his throat.
b *He shouted himself.

41. a *His throat was shouted sore.
b *Himself was shouted hoarse.

(39a, b) は許容される文であり、shout の結果、his throat が sore であり、himself が hoarse である。まえの動詞の結果として、あるものがある状態になる、という点では、たしかに (37b, c) の文と同じである。しかし、(37b, c) について、

37. b' He struck the dog.
c' He painted the wall.

(37b', c') がなりたつのに、(40a, b) では、これがなりたない。さらに、(41a, b) の受動態も許容されない。とすると、(39a, b) の his throat, himself は、とくに himself にみるように、たしかに、まえの he との関係で himself となっているにもかかわらず、shout の目的語とはいいがたい。類例として、よくあげられるつぎの例をみよう。

42. a The joggers ran the pavement thin.
b The clock ticked the baby awake.

これらの文は,

43. a *The pavement was run thin by the joggers.
b *What did the joggers run thin? (鈴木 1990)

などの非文からすると, (41a, b) でみた例とおなじく思われるが, 結果をあらわす部分についてみると, うえでみた例 (39a, b) とはちがう。(39a, b) の his throat, himself はいずれも, その文の主語 He にかかわるものであるが, (42a, b) の the pavement, the baby は, 主語の the joggers, the clock とはまったくかかわりのない, べつのものである。(ただ, 常識の問題として, the joggers と the pavement, the clock と the baby がおなじ場面 (picture) のなかにはなくてはいけない, ということはある。)

この一連の「結果構文」をみると, 動詞と, そのあとにある「目的語」とされる要素との関係に段階性があり, それが, つぎの例文にみられる段階性ときわめて類似しているということである。その例をみよう。

44. a I persuaded John to go.
b I expected John to go.
c I wanted John to go.
44. a' I persuaded John [PRO to go]
b' I expected [John to go]
c' I wanted [John to go]
45. a John was persuaded to go.
b John was expected to go.
c *John was wanted to go.

(44a) で John は persuaded の目的語であるが, (44b) では (44b') でみるように,

expected の目的語は、あくまで [John to go] であり、John は expected の目的語ではない、が「例外的格付与」(exceptional case marking)により、expected の目的語の資格を得、また、(45b) の受動態ができる。(44c) の John は、(44c') でみるように、wanted の目的語ではなく、(45c) でみるように受動態もできない。(44a, b, c) の各文で、John は共通に、まえの動詞の目的語のようにみえるが、これらは段階的に性格を異にする。

(44a, b, c) の persuade, expect, want は、それぞれ固有のふるまいをする動詞であるが、そのふるまいをみると、expect は want のようでありながら、persuade のような側面ももつことがわかる。persuade のような動詞をもとに「格理論」(case theory) はつくられているから、persuade からみると expect は「例外的」ということになってしまう。expect と同類とされている believe について Bolinger (1974: 71) が、

46. a We believe his story to be true.

b ?We believe his story to be false.

46. b' We believe [his story to be false]

b" We believe his story [PRO to be false]

(46b) の許容度を疑問視しているということは、Bolinger は、(46b) の believe のふるまいを expect のような (46b') ではなく、むしろ persuade のような (46b") と考えているふしさえある。

このことは、いまみてきた「結果構文」の場合にもみられるようである。すでにみてきた例を (44) の場合と比べてみよう。

47. a He painted the door white. (= 37b)

b He shouted himself hoarse. (= 39b)

c The clock ticked the baby awake. (= 42b)

(d *The dog barked ferociously the baby awake.)⁽²⁾

(47a) の the door は、たしかに painted の目的語であり、また、(47b) では、himself は shouted の目的語とはいえない⁽³⁾が、He shouted の主語 He との関係で「再帰化」されている。(47c) の the baby は ticked の目的語ではない。いま、(44a', b', c') になぞってみると、(47a, b, c) は、つぎのようになるであろう。

47. a' He painted the door [PRO white]
 b' He shouted [he hoarse]
 c' The clock ticked [the baby awake]

こうしてみると、(44) と (47) の文のあいだには、たしかに平行性はある。しかし、(44b') の I expected [John to go] の John にならって、(47b') の He shouted [he hoarse] の he が、「例外的」に「目的語」の資格を得て himself となったとするとすれば、それはほとんど意味がない。そもそも shout は自己完結的な動詞である。

そうすると、(47a, b, c) の文を説明する自然な方法というのはどういうものであろうか。まず、(47a) については、「主語・述語動詞・目的語・(結果の) 目的補語」が確立しているから、その方法によるのが自然であろう。(47b, c) については、(47a) を基本として、それにそって説明するのではなく、shout, tick の「目的語を必要としない」という性質をそのまま認めるところからはじめたい。それぞれ He shouted, The clock ticked で完結していることから、[he hoarse], [the baby awake] というネクサスが、「結果をあらわす」(to express the result of the action or state expressed by the verb itself) 「従属ネクサス」(dependent nexus) (Jespersen 1977 : 311) として「追加」された、とするのである。⁽⁴⁾ shouted, ticked のすぐあとにはなんの副詞的な要素も介在しないところから、shouted, ticked のあとは、すでにみたように、「語順の圧力」によって、[he hoarse], [the baby awake] の he, the baby はいかにも目的語のようにみえる、というわけである。(cf. Hoekstra 1988 : 123)。

このように、「結果」のネクサスが「追加」されたとするほうが、「みせかけの」(fake) 目的語を説明するのにも、「非能格動詞」による説明よりも全体として無理がないであろう。

8. It's some boys playing outside. の構造

48. A What's the noise?
 B That noise? It's some boys playing outside.
 B' That noise?*It's some boys play outside.

この (48B) で、「あの音? 子供たちが外で遊んでるのです」という、なんの変哲もな

い文で考えてみたいのは, (48B') のように play とはならないことである。これに関連してつぎの文をみよう。

49. a He caught the thief stealing the money.

b *He caught the thief steal the money.

50. a In this photograph you can see Joan blinking.

b *In this photograph you can see Joan blink.

(49), (50) の文において, 現在分詞の V ing 形は許容されているが, 「はだかの」(bare) 不定詞, V 形は許容されていない。一般に, V 形は, V で表されるもののはじめ, おわりがあり, V ing 形はその一部をさすといわれている。たしかに, (49) で泥棒をつかまえたのは, 盗みの動作の一瞬であり, (50) では, 写真に写るのは, ある動作のはじめからおわりまで, ということはありえず, その動作の一瞬である。このことからすると, (48B) の playing も, that noise? といったとき, それは, 子供たちの遊びの, はじめからおわりまでの音ではなく, その一瞬, ひとこまの音なのだ, ということになる。このことは,

51. a the sound of some birds crying/*cry

b the sight of some birds flying/*fly in the sky

c the smell of something burning/*burn

などでも確かめることができる。

つぎに (48B) の構造について考えてみる。

52. a What/*Who I heard was John laughing.

b A That noise? It was John falling down the stairs.

B Yes, I heard it?/him too.

Declerck (1981)

53. a The noise you hear is John (who is) beating his wife.⁽⁵⁾

(b It is quite a sight, a little boy getting his first haircut.)

これらの文から見て 'It' は「～が～している音」であることは明白である。

(52), (53) などの文を参考に, (48B) の文をつくる要素を, それぞれ検討の結果, 葛西 (1982) は, (48B) について, (個々の論証はここではしないが) つぎのような特徴を明らかにした。

- 54. a playing は some boys の様子を「一時的」にとらえた表現である,
- b some boys が意味上の主語, playing が意味上の述語である「ネクサス」関係をなしている,
- c この「ネクサス」は新しい情報をふくんでいる,

ことを指摘し, 文 (48B) は,

- 55. 知覚されうるあるものの「一時的」にとらえた様子をあらわす「ネクサス」が新しい情報となり, It is のあとに「補語」(「ネクサス補語」)⁽⁶⁾として示された構文,

であると結論した。

Faber (1987) は, (56B) のような例について, つぎのようにのべている。

- 56. A (What is the noise?)
- B It's just some STUDENTS DANCing.

(56B) の STUDENTS, DANCing の二つとも「新情報」であれば, 両方がアクセントをもつのは明白である ('it is equally clear, however, that they will need two accents if they are 'all-new') (Faber 1987 : 345) という。

この観点から, 類例と思われるつぎの例文を検討しよう。

- 57. This is Jane speaking. の構造

この文は, 従来の「5文型」では説明できない。This is Jane. を S V C としてしまうと, (ほかの部分省略しても, この部分は省略できない, という重要な情報をになっている) speaking のあつかいが不明となる。

毛利 (1962 : 109) のように, S V C C と考える人もいる。たしかに, This にたいしては,

Jane, speaking いずれも「補語」と考えることはできる。文型もふえるし、いかにも不自然である。

また、安藤（1983：58）のように、これを「文型」からはずしてしまい、This is Jane. と Jane is speaking. の「混交による派生文」とする人もいる。「文型」の数をふやしたくない、ということはわかるが、これでは「文型」の説明にはならないであろう。

ここでも（56b）とおなじく Jane speaking というネクサスが、全体として「補語」となっている（「ネクサス補語」）と考えるほうが無理のない説明ということになろう。（あとに見る（64a, b）を参照。）

9. この論文で検討しようとしてきた6種類の文の最後の文、

58. There was the horse galloping.

について、その特質をみ、その位置づけを考えてみよう。

59. a There is no use (in) making a promise we shouldn't be able to keep.
b It is no use continuing this discussion.
c It's (= There's) nobody here but me.

（59a, b, c）などの例をあげるまでもなく、there is... と It is... の関連性があることはよく指摘される。中村（1980）はこの点に注目し、つぎの文から、

60. a There's John playing with Susan/in the backseat/outside.
b It's John playing with Susan/in the backseat/outside.

there is N V ing..., と it is N V ing... の文の関連性に注目する。さらに、

61. It was John who broke the window.

（61）との類似性から、（60b）も it 分裂文の一種と考える。さらに（60b）との類似性から（60a）を分裂文の一種と考え、「there 分裂文」を提案する。しかし、これは一方的で、事実と反する。分裂文とするからには、（60a）において、John は焦点であり、playing 以

下は省略できる, 古い情報ということになるが, すでに Faber (1987) でみたように, playing 以下は, John とおなじく, 新しい情報であり得る。

また, There was a silence. で, 存在するのは「静かであること」という事実・ことであることがある。「もの」にたいして「こと」が第1次的である (広松 1979) というが, there is の「存在文」を, とくに「事態」・「こと」の存在として説明しようとしたのは中島 (1961:193-4) である。

62. a There is a bird singing.

b There is Father waiting for you in the car.

(62a) では「とりのなくあり」であり, (62b) では「父の汝を待つあり」であり, a bird singing, Father waiting という「絶対分詞句」(absolute participial phrase) が主辞 (subjective) の機能をしているとし, (62a, b) を

63. there × predicator × subjective (subjective × predicative)

のように分析する。これは, Jespersen (1971:52) で,

64. a It was a disagreeable duty over.

b S V P (S₂(21) P)

(64a) の a disagreeable duty over の部分を S V P の P と分析し, その P の内部を S₂P としているのは, 中島の subjective (subjective × predicative) とおなじくあつかうべきものである。

以上の議論から, What's the noise? にたいする It's some boys playing outside. の some boys playing outside の部分は, とともに「新情報」をつたえるものであるのと同様, there was the horse galloping は, 「(見ると) (例の) その馬がはしっていた」であり, 「既知」である the horse も, galloping とともに「新情報」として, そういう「ことがら」が存在することをのべたもの, と考えるのが自然である。Mathesius (1975:119) はこの種の文について「主語も述語も新しいこと (something new) をあらわす」としている。⁽⁷⁾ この文でも, やはり, ある「こと」がネクサスの形で表現され, それが「存在する」と新情報であることをしめす, と考えるのが自然であろう。

10. 結 び

これまで検討してきた6種類の文は、いずれも「5文型」では説明されない、ないしは、説明しにくいものである。なかには、「同族目的語」、「結果構文」という固有の名称をもっているものまである。それは、それなりに話題になり、研究の対象になっていることをしめしている。しかし、すでにみてきたように、なかには、それぞれの文の性質をつぶさに観察し、究明するよりは、ほかの文にひきつけて説明しようとするほうに、関心がそそがれているようにみえる。

すでにみた3種の例文でも、その性質は、段階的に微妙にちがひ、一つの「規則」で、その文の性質をそこなわずに説明できるとは思えない。トップ・ダウンの自律的な統語論では、個々の例を説明するにさいして、各語の性質を無視できず、「例外的格付与」というものを考えたりする。「例外的」にあつかわれた「語」はけっして「例外的」なのではない。ごくありきたりの believe などという動詞のふるまいを「例外」として扱わなければいけない理論は理論そのものが不十分であろう。

いっぽう、「文」は、それをつくりあげている要素の性質を考慮し、くみあわせ可能な要素どうしの、単なる組合せではない。「同族目的語」、ある種の「結果構文」の例などは、語の性質を土台にしていくことから始めるボトム・アップ式、また、自律的な統語論のトップ・ダウンの方法では、とうてい説明できない。

すでにみたように「追加表現」、「語順の圧力」が「5文型」からずれる多くの例を説明できる以上、これらを「構文」の問題としてしまうことはもともと必要ない。「構文」は、「語彙項目事例に基づいてボトムアップ式に成立していく」（早瀬 2002 : 243）ものとして、説明のために考えられたものであり、これを実体化するのは危険であろう。⁽⁸⁾

本稿では、「5文型」からは説明の対象となりにくいいくつかの例を、語の性質を重視しつつ、さらに、追うようにつけくわえられた「追加表現」が「語順の圧力」によって、それがいかにもその「文」の一部となってしまうことがある、という視点から説明をこころみた。

とくに本稿で検討した3種の文、

- 65. a The clock ticked the baby awake.
- b It is some boys playing outside.
- c There was the horse galloping.

で、(65a) は、the clock ticked で完結しており、そのあとの [the baby awake], (65b) では it is のあとの [some boys playing outside], this is のあとの [Jane speaking], (65c) では、there was のあとの [the horse galloping outside] というネクサスが「追加表現」としてつけられたものが、他の要素が介在しないために「語順の圧力」によって、まえの文にくみこまれた、一種の「合成表現」(synthetic expression) (Mathesius 1975: 146) と考えた。⁽⁹⁾

この基礎になっているのは、文をつくっている要素がたがいに関連し、全体として、どんな意味をもつかをさぐりあてよう、⁽¹⁰⁾ という欲求 (Trieb) であろう。それぞれの文は、それをつくる要素に「意味的な親近性」(semantic affinity) (Levin and Rappaport Hovav 1995: 254) があり、それらが 'tightly connected or associated' (Takami 1992: 113), 'something to do with' (Gundel 1988: 81), 'close association' (Bolinger 1974: 113), 'fit in' (Cattell 1976: 28) しながら文をつくっているはずである。このことを媒介にして、文の間に「関連性」をみようとする、Grice (1975), Sperber and Wilson (1986), Wilson and Sperber (1992) につながっていくことになる。このようにして、要素のあいだに「関連性」を探ろうとする、この欲求はふかく文法にかかわっていくことになる。

『文型』再考 (1) では名詞 (句) が、『文型』再考 (2) ではネクサスが、「追加表現」となって、まえの文につけくわえられたものが、まえの文の動詞のあとに (副詞的な) 要素が介在しないために、「語順の圧力」により、まえの文の要素としてくみこまれ、その結果と考える。5 文型で説明できない (または、説明しにくい) 文が説明できることをみた。また、同時に「格理論」, 「構文」などは、むしろ、個々の事実がもつ固有の性格をわかりにくくする可能性があることをみた。

注

(1) たとえば、この文は最近では、Non subcategorized NP intransitive based resultative として Rappaport Hovav and Levin (2001) などで扱われている。

(2) i *The dog barked us them awake. (Goldberg 1991: 73)

(i) では、us があり、これは「心的与格」(ethical dative) であると思われるが、たしかに動詞とネクサスの間に介在して非文をつくっている。

(3) 「述部には主部の役割をするものが要る」(predicates must find their subject role players) (Napoli 1989: 316) のであり、ここでは hoarse という「属性」(attribute) をになう attribuant であるとする (Halliday 1967 Part I: 43) ということになる。

また、Van Voorst (1988: 146) では

i He wrote himself sick.

(i) により, himself は, 書くこと自体には, 間接的にはかかわっている, としているが, himself が writing の目的語であるとはしていない。

(4) 'it is really the combination of the NP and the following predicative expression that is added to the intransitive verb' (Hoekstra 1988 : 116) を参照。

さらに, Carrier and Randall (1992 : 226) が, 'transitive and intransitive resultatives have identical syntactic structures, yet the former behave like persuade and the latter like believe with θ -role assignment to the postverbal NP' といっているのは, 「みせかけの」(fake) 目的語の性格をしめしておもしろい。

また, 影山 (1998 : 261) は,

i The joggers ran the pavement thin.

(i) について, 「道路のアスファルトが薄くなるほどたくさんその道路でジョギングをしたということであり, 実際アスファルトが薄くなったわけではない。この種の例は, 概念構造では上位事象 + 下位事象という形式をとっているものの, 意味的な力点は上位事象 (行為) のようにあり, 下位事象はむりやりくっつけた程度だと思われ, そのため, この種の表現は生産性が低い」とのべているのも「追加表現」としての性質を示しており, 興味ぶかい。

(5) 'who is' がついた方が「疑似関係節」(pseudo-relative) である。つぎのようにフランス語では, この形をとる。

i J'ai vu Marie qui pleurait.

I saw Marie (lit.: 'who was') crying

(Radford 1975 : 35)

これも「もの」と「こと」を区別しない, 興味ある例として考える材料になるであろう。

(6) 「ネクサス補語」という用語は普通ではないが, 「ネクサス目的語」と同様に, 「ネクサス」の機能的な用語としては無理はないであろう。さらにいえば, つぎの例などは「ネクサス主語」といってもさしつかえないであろう。

i John hitting M. was a horrible sight.

ii Workers angry about the pay is just the sort of situation that the ad campaign was designed to avoid.

iii John (John's) fortunately knowing the answer kept me from failing.

iv His biggest vice being drinking ginger beer made Sam feel very virtuous.

(7)

i A What was that?

B It's Little Jimmy. He has fallen down the stairs.

(Declerck 1981 : 146)

(iB) のようにできることでも, Little Jimmy, has fallen ~ とともに「新情報」となるのは明らかである。

(8) たとえば, 「二重目的語構文」では, この性質にあてはまらない envy, forgive を「例外」とする

のは、「格理論」で believe などに「例外的格付与」したのとおなじ姿勢がみえる。

また、これは、たとえば、「構文はそれ自体が心理的実在性をもつ重要な単位であり」(『構文文法論』記者解説 p. 328) といういい方などにもみられる。

(9) このほかに、これに類する用語としては、「凝縮」(condensation) (Sweet 1955 : 41), Jespersen 1977 : 29, 「統語的圧縮」(syntactic compression) (Quirk et al. 1972 : 724), 「構造的圧縮」(structural compression) (Leech 1974 : 193) などがある。

(10) 「英語の話し手は、不条理な文にでくわしたときにも、自分の解釈能力を最大限に働かせて、その意味を読み取ろうとする」(Leech 1974 : 8) などにも見られる。

参考文献

- 安藤貞雄 1983 『英語教師の文法研究』大修館書店
- Bolinger, D. 1974 “Concept and percept : two infinitive constructions and their vicissitudes” *World Papers in Phonetics* 65-91
- Carrier, J. and J. H. Randall 1992 “The argument structure and syntactic structure of resultatives” *L.I.* 21-2, 173-234
- Cattel, R. 1976 “Constraints on movement rules” *Lg.* 52-1, 18-50
- Declerck, R. 1981 “Pseudo-modifiers” *Lingua* 54, 135-163
- Faber, D. 1987 “The accentuation of intransitive sentences in English” *J.L.* 23, 341-358
- Goldberg, A. E. 1991 “A semantic account of resultatives” *L.A.* 21-1-2, 66-96
- Goldberg, A. E. 1995 *Constructions* The Univ. of Chicago Press (『構文文法論』河上誓作・早瀬尚子・谷口一美・堀田優子訳 研究社出版 2001)
- Grice, H. P. 1975 “Logic and conversation” *Syntax and Semantics* 8, 41-58 Academic Press
- Gundel, J. K. 1988 *The Role of Topic and Comment in Linguistic Theory* Garland Pub. Company
- Halliday, M. A. K. 1961 “Categories of the theory of grammar” *Word* 17-3, 241-92
- Halliday, M. A. K. 1967 “Notes on transitivity and theme in English” Part 1 *J.L.* 3-1, 37-81, Part 2 *J.L.* 3-2, 199-244
- 早瀬尚子 2002 『英語構文のカテゴリー形式』勁草書房
- 広松渉 1979 『もの・こと・ことば』勁草書房
- Hoekstra, T. 1988 “Small clause results” *Lingua* 74, 101-139
- Hornby, A. S. 1975 *Guide to Patterns and Usages in English* Oxford Univ. Press
- Hudson, R. A. 1971 *English Complex Sentences* North-Holland
- Jespersen, O. 1971 *Analytic Syntax* Maruzen
- Jespersen, O. 1977 *Essentials of English Grammar* George Allen and Unwin
- 影山太郎 1996 『動詞意味論』くろしお出版
- 影山太郎 2001 『動詞の意味と構文』大修館書店
- 葛西清蔵 1979 「‘to sleep onself sober’ の構造」『北海道大学文学部紀要』27-2, 3-30
- 葛西清蔵 1981 「‘there was the horse galloping’ の構造」『北海道大学文学部紀要』29-2, 49-75
- 葛西清蔵 1982 「That noise? It’s some boys playing outside. の構造」『北海道大学文学部紀要』31-1, 5-30
- 小西友七 1964 『現代英語の文法と背景』研究社

- Leech, G. 1974 *Semantics* Penguin Books
- Levin, B. and M. Rappaport Hovav 1995 *Unaccusativity At the Syntax-Lexical Semantics interface* The MIT Press
- Mathesius, V. 1975 *Functional Analysis of Present-day English on a General Linguistic Basis* Mouton
- Milsark, J. L. 1979 *Existential Sentences in English* Garland Publishing Company
- Moulton, W. G. 1973 "Sentence features in embedded sentence" *You Take the High Node I Take the Low Node* Chicago Linguistic Society
- 毛利可信 1962 『英語意味論研究』 研究社
- 中島文雄 1961 『英文法の体系』 研究社
- 中村捷 1980 「there 分裂文」 『英語青年』 125-11, 20-22
- 中村捷・金子義明 2002 『英語の主要構文』 研究社
- Napoli, D. J. 1989 *Predication Theory* Cambridge Univ. Press
- Perlmutter, D. M. 1978 "Impersonal passives and the unaccusative hypothesis" *Proceedings of the Fourth Annual Meeting of the Berkley Linguistics Society* 159-89
- Pizer, K. 1994 "Perception verb complementation : a construction-based account" *CLS* 30-1, 335-345
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik 1972 *A Grammar of Contemporary English* Longman
- Radford, A. 1975 "Pseudo-relatives and the unity of subject raising" *Archivum Linguisticum* 6, 32-64
- Rando, E. and D. J. Napoli 1978 "Definiteness in *there*-sentences" *Lg.* 54, 77-105
- Rappaport Hovav, M. and B. Levin 2001 "An event structure account of English resultatives" *Lg.* 77-4, 766-797
- Roberts, I. 1988 "Predicative APs" *L.L.* 19, 703-710
- Simpson, J. 1983 "Resultatives" In : Levin, Pappaport and Zaenan (eds.) *Papers in Lexical Grammar* IULC
- Sperber, D. and D. Wilson 1986 *Relevance: Communication and Cognition* Blackwell Pub.
- Sperber, D. and D. Wilson 1987 "Precis of relevance: communication and cognition" *Behavioral and Brain Science* 10, 697-754
- 鈴木英一 1990 『統語論』 開拓社
- Sweet, H. 1955 *A New English Grammar* Oxford Univ. Press
- Takami, K. 1992 *Preposition Stranding* Mouton
- 高見健一 2001 『日英語の機能的構文分析』 鳳書房
- 高見健一・久野暉 2002 『日英語の自動詞構文』 研究社
- Van Voorst, J. 1988 *Event Structure* John Benjamin Pub. Company
- Williams, E. 1980 "Predication" *L.I.* 11, 203-238
- Williams, E. 1983 "Against small clauses" *L.I.* 14-2, 287-308
- Wilson, D. and D. Sperber 1992 "An outline of relevance theory" in Konishi, T. et al. (eds.) *Current Approach to Linguistics* The Eichosha Ltd.